

要旨

成熟のレトリックと新しい経済活動 — ジョージ・エリオット『フロス河の水車場』 —

秋山 義典

ジョージ・エリオット『フロス河の水車場』を「成長」という視点で考察した。兄トムと妹マギーが対照的な人生を送る。兄トムは、教養を身につけて成長するというよりも、社会の中の経験を重ねていくことにより、「成長」を実感することができる。没落しかけた一家の危機を救うために、新しいビジネスの誕生に関心を示した。旧世界の国内経済から新しい経済活動に移行する時期であった。それによって一家はその危機を回避することに成功する。一方、マギーは、好奇心が旺盛で高い教養を身につけて自分を大きく成長させたいと願うものの、その最中に、結婚による自己実現のチャンスも暗示しつつ、兄のように自立するために自己成長することを祈願しながらも、社会の高い壁に阻まれ、自己の葛藤を繰り返す。その両者の違いを、男女の社会的な性差、経済活動、結婚、あるいは「教養小説」という文学ジャンルから考察した。

Abstract

Maturity Rhetoric and New Economic activities-George Eliot's *The Mill on the Floss*

Yoshinori AKIYAMA

This paper talked about how George Eliot's *The Mill on the Floss* was considered in terms of "growth." Brother Tom and sister Maggie lived a contrasting life. Brother Tom was able to realize "growth" by accumulating experience in society, rather than growing up with education. It was time to change from the old-world domestic economy into new economic activities by showing an interest in the birth of new businesses to save the falling family crisis. Therefore, the family succeeded in avoiding the crisis. On the other hand, Maggie wanted to grow herself with a strong curiosity and a high level of education. The differences between the two were considered in terms of viewpoints such as social gender, economic activity, marriage, and the literary genre of "Bildungsroman." In the end, while hoping strongly for growth, she was hindered by high social barriers and ended up repeating her own conflicts.

成熟のレトリックと新しい経済活動

—ジョージ・エリオット『フロス河の水車場』—

秋山 義典

1. 兄妹の自己発展

ジョージ・エリオット『フロス河の水車場』(1860)のなかで、ふたりの兄妹の姿が極めて印象的である。ふたりは反発しながらも、それぞれの道を懸命に生きながら、最後小舟に乗ってしっかり抱き合ったまま濁流にのみ込まれていく。この兄妹とは兄トムと三歳年下の妹マギーである。トムとマギーは家族のなかで同じように愛情をうけて育てられているにもかかわらず、兄妹の人生は、成長の時間の中で微妙にすれちがいを見せる。マギーは女性に生まれついたがゆえにいくつかの困難に直面する。この時代にひとりの女性がどのようにして成長を実感できるのか。成長したいと願いながらも、彼女はいくつもの人生の壁にぶつかって、それを乗り越えることの難しさや立ち止まっては孤立するようすが繰り返される。一方、トムは、周囲の期待に応えるかのように旧社会の経済から新しい経済の展開を予測するかのように、新しいビジネスの可能性を探りながら、一家を救うためにその新しい成長への道筋が見とおせるようになる。読者は好奇心豊かなマギーが教養を身に着けて、兄のように大きく成長することを期待するかも知れない。にもかかわらず、女性には男性と同じような成長の機会が与えられないままでストーリーは終わりに向かう。女性主人公は、自分の成長を実感したくてもできない。その自己実現の可能性を探りながらも、自己成長の未完成がどんどん引き延ばされてしまう。いつになれば、このような女性を取り囲む環境の困難さは、改善されるのであろうか。こういう視点で見ると、この小説が投げかけている問題は、19世紀後半の旧世界の出来事でありながら、女性の自己実現の難しさを暗示させる現代的な問題提起としても考察することもできるだろう¹。

若い登場人物が成長をとげていく姿を描いた物語は、教養小説 (bildungsroman) と呼ばれる。その主体は男性である場合がほとんどである。しかし、この物語では、マギーという女性主人公の姿が極めて印象に残る。その女性の成長とはいかに表現されているのだろうか。その点に本論では注目したいと思う。一般的に、教養小説を考察するにあたり、登場人物は成熟を経て、いかにして成長して大人になってい

くのであろうかと考えることになるだろう。それは主人公の「成熟」をどのようにみるのかという問題にも言及することになるだろう。教養小説のなかでかれらは、成熟の上り坂を徐々に登っていくはずである。それは「成熟」の度合が自己発展として、どの程度進行しているのか考察することになるだろう。あるいは反対に、自己形成が後退している場合もありうる。いずれにしても、主人公がどのような環境に置かれているのだろうか。いかに「自己発展」が展開されているのか、その環境とはどのように描かれるのだろうか。

この小説は作者ジョージ・エリオットの幼年時代の思い出が、色濃く反映されている。彼女の自伝やその他の記述の中でも、兄妹の關係に言及されることがあり、その特異な關係がよく表れている。特に兄を慕う妹の強い気持ちが特徴である。兄は豊かな教育を受けることができるのに、自分は、兄のようなよい教育環境にあこがれても、同じような教育の機会が与えられる機会に必ずしも恵まれるわけでない。それでも、「自己発展」あるいは「自己育成」の機会が兄妹におとずれる。たとえば、兄はラテン語の教育を受けることができるが、妹は言語に大きな好奇心を持っているにもかかわらず、その機会はあたえられない。妹は兄には教育の大きなチャンスが与えられているのを目の前にしたとき、妹は、自分にも学びの機会があればいいと感じたことであろう。文字どおりの「教養」に対する強いあこがれが描かれている。こうした経験が、ひとつには兄に対する強いあこがれを抱ききっかけになっている。兄を精神的に慕う妹の意識の中に、自己の知的好奇心を刺激するあこがれの存在となる兄がいる。そのような彼女のころにはあこがれの兄であるがゆえに、あこがれの度合いは単なる兄妹のちがいを超えて、妹は教養への強い関心を抑えることができない。彼女が抱く「自己発展」への期待があらわれている。「教養」のあこがれとは、自己成長の点でとても興味深い感情である。同時に、兄を想う妹の気持ちは、読者のなかでは、かなり独特な印象を受けるかもしれない。しかし、兄はそれほど妹を想う気持ちは強くない。なぜそこまで、兄を慕うのか。はっきりとした理由は小説の中では明確には言及されない。この背景には、作者ジョージ・エリオットの兄が、実際彼女には羨望の対象だったといわれる²。こうした自伝的な背景が、兄妹關係の描写に少なからず影響を与えている。この小説の最後の場面ではこの兄妹の絆の強さは強調されることになる。

この兄妹は対照的に描かれているようにみえる。男性の主人公トムは、どのような人間かという、合理的で冷静な実務的な人物に描かれている。その一方で妹マギーはどのような人間であるかという、情熱的で想像力豊かな女性に描かれているのが特徴である。こうした兄弟の対比に焦点が当てられていて、教養小説と教育という点からもその關係は対象的に描かれている。兄妹の最後に見られる場面では、

兄トムと妹マギーの運命的な結びつきが暗示される。この小説の最終場面でもこのふたりの関係の独特なありかたが神話的なかたちで示されている。この兄妹の繋がりを表す特徴のひとつである。

2. 「教養」の不均衡

グレック伯父はトムとマギーに向かって、父親が勉強に多くの資金をつぎ込んだことを証してこんな詩を披露してみせる。一家は、自分たちが過ごした家が売りに出されるような経済的な事態に直面している。

When land is gone and money spent
Then learning is most excellent --- (223)

土地がなくなり、お金が使い果たされて、ものを学ぶことが尊いものになるという内容の話をふたりに言い聞かせようとする。贅沢な日々を送るのではなくて、世間の厳しさのなかで質素になにか役立つことをするように警告している。その警告にもかかわらず、なにかを学ぶことの意味は人生を生きる上で役に立つものになっていないとグレック伯父は皮肉を込めてほめかしているように見える。父親は学ぶことの意味を、特にトムに何度も言い聞かせている。父親の意図することは、さらにマギーにも伝わっていると思われる。学ぶこと (learning) の意味とは、何であろうか。教養を身に着けることとは、いかに考えられているのだろうか。

トムは常識と慣習の世界のなかで生きている。将来は実業家になりたいと思うトムであるが、ドールコウト水車場の経営者である父親タリヴァーは製粉業を営み、息子のトムには一流の教育を受けさせたいと願っている。父親は、大金を払って、息子に立派な教育をうけさせようと決心した。何の教育を受けずに、教育のないことを身に染みて感じていた。(I've paid a deal o' money...I was determined my son should have a good education: I'd none myself, and I've felt the miss of it. (270-271)) そこでタリヴァー氏は息子トムにはオックスフォード出身のステリング牧師が運営する学校で教養を身に着けさせることを決意する。トムはラテン語、ユークリッド幾何学などの勉強に励むことになるのだが、皮肉にも、実は、実業家になりたいトムにはステリング牧師の教養が彼の日常生活から遠くはなれた存在に見えていた。

As for Tom's school course, it went on with mill-like monotony, his mind continuing to move with a slow, half-stifled pulse in a medium of uninteresting or unintelligible

idea. (196)

トムの学校の授業は、彼にとっては、水車のような退屈な単調さ (mill-like monotony) で進んでいき、彼の精神 (his mind) は興味のない、あるいは理解できない観念によって、ゆっくりとはあるが、半分が窒息したような脈拍のなかを進行しつづけていた。このようにゆっくりと落ち着いた精神には、せっかくの教育の機会が用意されているにも関わらず、一見十分豊かにあたえられた教育環境は、兄トムのなかでは、父親の期待に反して十分に生かされていると思えない。従来の教養小説では、男性の主人公が修業時代を経て、社会とのかかわりのなかで「自己成長」を遂げていくが、トムのような主人公には、教養という文化的な活動に対するあこがれの度合いは、低いようにみられるし、父親の期待からも、大きな距離がみられるように思われる。

I don't like Latin and those things. I don't know what I could do with them unless I went as usher in a school; and I don't know them well enough for that: besides, I would as soon carry a pair of panniers. I don't want to be that sort of person. I should like to enter into some business where I can get on – a manly business, where I should have to look after things and get credit for what I did. And I shall want to keep my mother and sister. (241)

トムはこのようにラテン語やそういう勉強が嫌いだと述べる。学校の教師にならないのならば、ラテン語など学んだところでなにをすればよいかわからない。言葉の勉強など自分には必要ではない。むしろ、荷かごをかつぐほうがよい。自分が活躍できるような実業界に入りたい。男らしい事業で、そこで、周りの面倒をみることや、自分の仕事で信用を得られるようにしたい。それで、自分で母親と妹を養いたい。このようにトムは学校での勉強に打ち込むより、実業家として社会のなかで成長したい自分の気持ちを主張する。それでは、そもそも教養小説における「教養」とは、どのような意味が込められているのか。

マギーは読書好きで、バニヤン『天路歷程』やデフォー『悪魔の歴史』, ギボン『ローマ帝国衰亡史』を読んで、物語からさまざまな連想を受ける感受性が豊かな女性であった。ラテン語で苦しんでいる兄のすがたをみて、楽しそうにラテン語の文法を操ることができるマギーがいた。兄は女子にラテン語がわかるわけがないと決めつけている。句読点の意味もわかっていないトムにセミコロンの使い方を教えたりしている。兄の学校を見学した。学内の図書館に入ったマギーは、書棚の本の中から

天文学者がラテン語で書いた本の一節を読んで、その学校の先生にその理由を尋ねたりする。トムに比べて、はるかに知的好奇心をもった女性像がマギーでないだろうか。彼女はトムの学校の教師のステリング牧師にこんな質問をする。

'Mr. Stelling,'she said, that same evening, when they were in the drawing-room, 'could I do Euclid, and all Tom's lessons, if you were to teach me instead of him?' (158)

先生、わたしはユークリッド幾何学や兄のトムが勉強していること全部できますかと。そうするとトムは女子には幾何学なんか勉強できないし、そんな勉強できるわけがないと言い切る。先生は、女子はなんでも少しずつ身に着けていくから、表面的には知恵を身に着けていくことができると答えると、その理由を聞いてマギーはひどく落胆してしまう。ものごとを深く考察することができないといわれたのが自分では納得がいかなかった。兄妹間で「教養」の不均衡が起こりつつある。そもそも女性に教養が必要であるとは思われない時代ではあった。兄のトムには性差による教養の不均衡に対する悔しさの感情が不思議と沸き起こることがないが、妹マギーには、学びについての食欲さを隠しきれない。教養を高めることができる兄に対しての強いあこがれをマギーは精神的に示そうとしている。マギーは自分が「自己発展」できないジレンマを抱えているが、そこには男性だけに与えられる教育の機会が優遇されて、それに対する19世紀後半の社会にとっての女子教育のありかたの難しさも同時に暗示される。兄妹の教養的な不均衡からは「自己育成」のパラドックスが伝わってくる³。その意味で、女性として成長を願うマギーであるが、その点では、実業家的なトムとは対象的に、マギーが示す知的好奇心に精神的な成長の可能性を見出すことができるかもしれない。それはこの小説前半のマギーという女性の成長を期待できる展開がみられるかもしれない。そこにこの物語の前半部の特長があるように思われる。

3. ジプシーと田園風景の英国

知的好奇心が旺盛なマギーであるが、小説のなかでは、女性の教育に厳しい母親からは冷たい視線で扱われる。マギーは洗面器の水を突然頭からかぶり、水にぬれた髪を振り乱して屋根裏部屋に引きこもり、大声で泣き崩れたり、いとこのルーシーを突然泥沼に突き落したりした。その激しい気性とその唐突な行動から女子とはあるまじき存在というふうにみられてしまう。彼女は「ジプシーのようで半分は野

蛮 (like a gypsy and half wild)」(88)といわれる。タリヴァーの家族や親族のなかで異質な存在として家族の中でうまく適応することができないと彼女は強く感じるようになる。やがて、彼女は自分の居場所を探して自分の世界を見つきたいと家を出てしまう。

元来、彼女は臆病さと圧倒的な本能という両極端な性質を持ち合わせている。彼女を取り囲む近代的社会の限界を意識したのかもしれないが、自分を批判する声からみずからを遠ざける必要を瞬時に感じ取ったマギーは、自分の考えでは、行き場のない自分を受け入れてくれる場所であるかもしれないと期待して、ジプシーの共有地を訪れた。現実の社会や家族の中で自分だけが変人扱いされている苦しさから、自分の居場所が、ジプシーたちの中にはあるかもしれない。この土地には自分に対する差別はないだろうと幼いマギーは、ジプシーのキャンプに淡い期待に胸をおどらせる。

考えてみれば、ジプシーたちの仲間に入ることはその彼女が示す唐突な行動のひとつとみられている。赤ちゃんを抱いたジプシーの女性にむかって、あなたたちとともに暮らしたいと思ってここに来たと告げると、そのジプシーの女性はマギーを仲間のいる場所に連れていく。ジプシーの一族のなかに入るとジプシーたちが自分に尊敬を払って迎えてもらっていることを感じる。そうした期待にもかかわらず、彼女の貧しい知識では、ジプシーがどういう人々なのか知る由もなかった。かれらにも十分な食べ物があり、パンにバターを付けて食べる習慣があると思込んでいる。かれらは盗賊の一味であるとは気が付きながらも、ジプシーのなかに入って自分に何ができるのか、マギーは自問自答するのである。それはかれらの生活を改善すること、文明化することが自分の役割ではないかと思っている点が極めて興味深い。そこで彼女はジプシーにコロンブスの話を語り始める。

‘Columbus was a very wonderful man, who found out half the world and they put chains on him and treated him very badly, you know--- it’s in my Catechism of Geography---but perhaps it’s rather too long to tell before tea.....I want my tea so.’ (117)

コロンブスはたいへんすばらしい人物で、世界の半分を発見したというのに、人々から鎖で縛られて、ひどい扱いをされたと指摘。その点は、彼女の地理問答の書物に書いてあると説明する。お茶の時間になるまでにこの話は長すぎて話しきれないと語ったかと思えば、次は、彼らの前で優雅に世界の文明化について語ってしまう。彼女が書物を通してコロンブスについて知ったことは、成長の「自己発展」の成果

である。さらに書物から獲得した高尚な教養を受けた彼女は、最後には、ジプシーに対してお茶が飲みたい、と言ったりする。しかしながら、ジプシーたちに「教養」をいくら伝えたところで、かれらにマギーの話はなんの関心も引き起こすことができなかった。なぜならば、ジプシーとは事実、粗野でずる賢い盗賊でもであると見られていたからである。

同時にマギーによるこの啓蒙活動は、当時の英国対植民地の対立関係を連想させるかもしれない。彼女は無意識のうちに消えゆく英国のある風景をジプシーの逸話で暗示しているとも言える。時代的には、1810年代から1830年代にかけて英国は農業社会から産業国家に変わりつつあった。マギーが述べる話は旧社会から新しい社会の変化を暗示させるかもしれない。ジプシーのなかに逃げ込んだマギーには自分が想像した世界とは反対に、調和できない社会の現実がそこにあることを痛感させられる。この場面を考察するとき、10歳たらずの少女が語る姿には単なる幼い子供のほほえましいひとつのエピソードとして語るだけでは終わらない箇所である。このような行動力を顕示するマギーのあくなき探求心に驚かされるが、そこには同時に彼女の行動から、知らない相手にむかって、教育、啓蒙したい意欲の一端が消えていく英国の原風景として歴史的背景の一部を垣間見せる。そうした古い世界に目を向けざるをえないような当時の社会の変化が起こりつつあった点。それが観察できるのではないだろうか⁴。同時に普通の人間では近寄りがたい危険な地域に乗り込んで、無知な人々に新しい知識を教えることによって、「自己育成」を高めることに価値を見出しているのではないだろうか。そこにマギーの教養的な「自己修練」の特徴が暗示されている。だからこそ、読者は、この物語のマギーの啓蒙活動のなかに、英国の急速な社会変化を見出すことができるかもしれない。歴史的に見ると、19世紀後半の地方社会では、ジプシー集団が、よく目撃された。彼女の行動は、非難もされたはずであるが、現代の読者の視点からみれば、旧世界と新世界の境界を同時に暗示しているかもしれない。こうした積極的なマギーの行動から、かつてのイギリスのノスタルジックな世界が新旧世界の境界線の上でせめぎ合う社会変化の一端が際立っているのがわかる。

4. ウサギの話からみる「成熟の自己」

トムが大切にしている2匹のウサギがいる。トムは、妹のマギーに自分が学校にいらしているときに、忘れずにウサギのお世話をしたいと頼んでおいた。ところが、マギーは、うっかりしてウサギにエサを与えるのを忘れてしまった。兄に頼まれたことなのに、忘れてしまい、2匹を死なせてしまうのだった。トムがそのこと

を知ったら、どう思うだろうか。そのことを思い出すだけで、マギーの目から大粒の涙が止まらなかった。マギーは兄が大好きで、兄から愛されたいと心の底から思っていたのだ。トムはウサギのエサを忘れたぐらいは、それほど大きな意味は感じていなかった。「あずはおまえを釣りにつけていかないからな」程度の軽い反応だった。それに対してマギーは兄の怒りには、極端なほど深刻に反応してしまう。

'O, please forgive me, Tom; my heart will break,' said Maggie, shaking with sobs, clinging to Tom's arm, and laying her wet cheek on his shoulder. (39)

マギーはおねがい、わたしのことを許してくださいと泣きながら、兄の腕にすがりながら、涙にぬれた頬を肩に押し当てて、トムに謝ろうとする。ここではウサギのことをトムに打ち明けるまえに、マギーは「あのウサギをいくらで買ったの (How much money did you give for your rabbits?) 」とトムに聞いている。どんなふうに話したら、兄の怒りが和らぐのか、そればかりが気になってしまうのである。マギーの頭には、お金を払うことでトムにウサギのことを許してもらえるのかもしれないというとっさの判断がよぎったのではないか。兄は「半クラウン銀貨が二枚に六ペンス銀貨一枚」とすぐに答えている。

'I think I've got a great deal more than that in my steel purse upstairs. I'll ask mother to give it to you.' (39)

マギーはそれ以上の額を針金細工のお金入れに入れているので、トムにあげるから、許してほしいと持ち掛ける。兄は、空想や夢にあこがれるマギーとはちがって、勤勉な現実派タイプの人間だから、きっとそれ以上のお金を払うことで、わたしの過ちを許してもらい、再び兄からの愛情を受けることができると思ったはずである。マギーが慕う兄トムへの気持ちは、「愛されたい欲求」の度合いを示している複雑な兄弟の間柄である。しかし、そのようなマギーの気持ちははねつけるかのように、トムはマギーの貯めたお金などはいらないときっぱり拒否する。

'What for?' said Tom. 'I don't want your money, you silly thing. I've got a great deal more money than you, because I'm a boy. I always have half-sovereigns and sovereigns for my Christmas boxes, because I shall be a man, and you only have five-shilling pieces, because you're only a girl.' (39)

トムはマギーのより多くの額を払うことに何の意味を見出さない。マギーの貯めたお金なんかいらぬ。男子はマギーよりはたくさん持っているから。クリスマスプレゼントで半ポンド金貨と一ポンド金貨をもらっている。しかし、マギーは女子であるという理由で、5シリングしかもらうことができないという。トムはそれだけで十分意味があると思っている。マギーにはお金を求めないトムの主張には、これから自分は一人前の大人の男になるからという未来の成長を暗示させるものがあるかもしれない。それはそれで兄トムとして積極的な態度を貫いたといえるだろう。しかしながら、トムの主張を、マギーの視点で見れば、まったく正反対な成熟の姿が記述されているのではないだろうか。マギーはどこまでもいっても女性になることはない。トムは大人(a man)に成長できる可能性があっても、マギーには時間を経ても、大人に成長する可能性を秘めた「成熟の自己」の姿が十分には見えない。少女(a girl)の状態であることから彼女の成長は未来という時間のなかで次の段階に展開しようとしぬ。経済活動の領域の外部に置かれて、未来時制を欠いたままの少女の状態から変化が見られない。トムの物語は上昇気流の成長がみられる教養小説であるが、マギーのほうは、成長停止の急降下に向かうとスーザン・フレイマン(Susan Fraiman)は指摘している⁵。その後タリヴァー一家は父親が水利権の裁判で負けたあと、破産の憂き目に会う。一家の破産は家族を苦境に追い込んでいく。トムは学業をやめて倉庫で仕事を始める。父親とトムは借金返済のために懸命に働いた。目標に向かい「成熟の自己」を獲得しつつあるトムとは対象的にマギーには、「低成長の自己」ばかりが顕著であり、成長を意識させる「自己育成」の展望がなかなか開かれぬ。リアルな世界で自分らしさの生き方を見失い、借金の返済で必死に働くことができる兄トムのことがうらやましかった。書物は売り飛ばされて、ピアノもなくなり、自分独自の空想の世界に逃避することさえ難しくなっていた。

5. 新しい経済活動をめざすトムとボブの新事業

父親のタリヴァー氏は水利権にこだわりつづけて、借金を背負って水車場をめぐり、裁判を起こして、家族を破滅に追い込んだが、一方トムは、勤勉に働いた。「水車小屋」の田園農村的な世界に生きたタリヴァー一家は伝統的な英国世界が終わりを告げている様子が見える。農業社会から、産業・工業に社会が移行していた。やがて友人の手を借りて、新しい経済活動のチャンスに恵まれることになる。それはボブからの投資の話である。トムはこの昔の友人から、聞いたこともない流通事業の話を知ることになる。やがて彼は投資による積極的な経済活動の可能性に気が付く。それによって一家の借金を返済するめどをつけることができるようになる

かもしれないと予感する。そのきっかけをつくったのが、ボブ・ジェイキン (Bob Jankin) である。

彼がどういう人物かという、ユーモラスな登場人物で、グレッグ夫人とは対象的な人物である。ボブはトムから騙し取ろうと投資を持ち掛けたのではないようである。もともとはトムの遊び相手のボブであったが、行商の旅から帰ってきたボブは聖オグの町から帰るトムを見つけてお金を稼ぎたくないかとたずねる。荷物を積んで外国の港に出すことで、運賃と手数料を払って一割か一割二分儲かるという話であった。

'An' it's me as put Mr Tom up to the bit o' business, for Mr Tom's been a friend o' mine iver since I wor a little chap---fust thing iver I did was frightenin' the bird for th' old master. An' if a bit o' luck turns up, I'm allays thinkin' if I can let Mr Tom have a pull at it. An' it's a downright roarin' shame, as when he's got the chance o' making a bit o' money wi' sending goods out---ten or twelve per zent clear when freight an' commission's paid---as he shouldn't lay hold o' the chance for want o' money. (326)

ボブはこのようにトムにこの儲け話をした後、グレッグ伯父に次のように話している。ボブはトムさまに少し商売をしてみたらと勧めたというもので、というのもトムさまは子供のときからのボブの友達でだんな様の最初の仕事は、小鳥を追い払う仕事であったという。それがきっかけになり、トムさまにひとくち仕事を紹介できないだろうかといつも考えているとボブは語っている。全く残念なことだが、品物を送りだして、少しでも、もうかる機会があるのに、運賃と手数料を払ったあとでも正味 10 パーセントか 12 パーセントもうかるはずだが、そこに投資する資金がないためにその機会を取り逃がしてしまうのはとても残念とボブは語っている。谷田恵司によれば、このボブの仕事とは、レース模様のベネチアングラスを海外の港に運搬する仕事やオランダに布地を売る仕事であった⁶。1861 年～65 年の米国南北戦争の後、米国の奴隷プランテーションで育てられた綿花を英国は輸入した。輸入した綿花を布地に作り替えて、英国の植民地に売りこむ事業が展開している。トムの話は、商品を運搬する新しい流通事業のはじまりに言及している。しかし、父親自身はこの事業の成功には懐疑的で、この事業に投資しても資金は回収できないと思っていたが、トムはこの新規事業の可能性に期待を寄せていた。お金を新しい分野に投資することで、利益をあげることが可能になると判断。商品の流通を通して経済活動をおこなう、新しいタイプの経済活動が展開しているのが暗示される。外

国に品物を輸出する流通事業を通じて利益を得ることが可能になるかもしれない。デルモット・コールマンの *George Eliot and Money* (2014) は、当時のジョージ・エリオットがいかに関女の小説のなかにお金、金融、経済を反映させていたのかを考察しているが、この書物では投資では、10パーセント程度の利益が見込めるといわれるが、それは確実なリターンとは言えない。その投資はその他の金融取引のリスクに比べると、当時の地方社会に暮らす中流階級の人々にとっては、かなりのリスクの高い事業であったと指摘されている⁷。

グレッグ夫人はお金にうるさい人物であるが、その夫人も最初はこういう商人活動を嫌っていたが、グレッグ一家ではトムには事業展開の手腕を認めて、トムにこの事業を進めるように促す。それとともにトムは自分の中に「自己鍛錬」の成長を感じることができた。グレッグ一家から資金を借りることができて、トムの新しい事業とボブの貿易投資の経済活動が順調に展開した。労働による経済活動とは異なり、投資による経済活動が近代的な資本主義経済の登場を予感させる。一家が負った負債を返済することができる機会になった。ボブが紹介した投資の機会は、やがて軌道にのっていくことになる。こうした新しい経済活動は、イギリスの社会構造の変化も示している。一方トムの新事業について彼が行ったことは何かといえ、ディーン伯父から仕事をもらいながら、ゲスト商事で、事務員としてトムははじめに働いたことであった。伯父の勧めで、学校で簿記を習った。この事業のために、息子のトムは父親に流通事業に投資の話を持ちかけて新規事業の可能性を相談した。父親タリヴァー氏はその投資がうまくいかなければ、家族の一年分の資金をすべて失う可能性もあるから、この新しい経済活動には慎重でもあったが、その投資による利益により、タリヴァー家は蓄財を重ねて、ついに父親の残した負債を返済することができるようになった。トムにとってもっとも輝かしいときがやってきたのであった。まさに実業家の誕生であり、それは近代的なイギリスの新しい姿の一面を示している。こうした新しい社会イノベーションとしての「成熟の自己」の可能性をトムは強く感じ取ったのではないだろうか。父親のタリヴァー氏は水利権にこだわりつづけて、借金を背負って水車場をめぐる、裁判を起こして、家族を破滅に追い込んだが、一方トムは、危機にあった一家のために勤勉に働いた。「水車小屋」の田園農村的な世界に生きたタリヴァー一家の様子を見ると、伝統的な英国世界が終わりを告げている様子が伝わる。農業社会から、産業・工業に社会が移行していた。やがて友人の手を借りて、新しい経済活動のチャンスに恵まれることになる。それはボブからの投資の話である。トムはこの昔の友人から、聞いたこともない流通事業の話を知ることになる。

彼は負債を返済することができるようになった。トムにとってもっとも輝かしい

時代がやってきたのであった。まさに実業家の誕生は、近代的なイギリスの新しい姿の一面を示している。こうした新しい社会イノベーションとしての「成熟の自己」の可能性を読み解くことができるのではないだろうか。

6. マギーの結婚と経済活動の不在

タリヴァー家が一時経済的苦境に落ちいった後、果たして、妹マギーの「自己鍛錬」はどのように展開をみせるのであろうか。一家は家財道具を売却して、自力で一家を再建しようとする。マギーの愛読書は売られて、彼女の感性は空想の世界で美へのあこがれを否定するような方向に向わざるを得なくなった。父親が亡くなり、彼女の仕事は家庭の中での裁縫でシャツを縫ったりすることや、教師の仕事を2年間勤めることぐらいしかなかった。

物語の後半では、マギーはスティーブン・ゲストと知り合いになり、この魅力的な青年と恋に落ちる。もしかするとマギーにとっては結婚という形で、自己実現の可能性がのこされているのではないだろうか、読者が予感する。ゲスト商事の息子で、教養があり、洗練された青年である。スティーヴンはディーン伯父の娘ルーシーと婚約していたが、個性的なマギーにこころひかれる。スティーヴンがマギーに結婚を申し込むが、二人の関係はふたりだけの駆け落ちまで展開するが、結局のところ、その申し出を断ると、たちまちマギーはいとこから婚約者を奪い取った墮落した女性として、聖オッグの町で中傷されるようになってしまう。このように結婚による「成熟の自己」を達成することは不可能になる。彼女の人生にとっては、トムの経済活動とは対照的に結婚することが人生の契機にならない。読者の期待とは反対に結婚という自己実現の選択を選ばない点がマギーらしい生き方を提示していると思われる。

こうした苦難を乗り越えようと、新しい「自己育成」の可能性を希求したマギーはなんとか仕事を見つけようと努力したが、タリヴァー家は中産階級であったため、女性として働くことは社会的な体面にかかわることであった。マギーが聖オッグのリンネル商をおとずれて、仕事の注文をもらい出かけたとき、兄トムはマギーにこのように忠告している。

For example, she not only determined to work at plain sewing, that she might contribute something towards the fund in the tin box, but she went in the first instance in her zeal of self-mortification to ask for it at a line-shop in St Ogg's,

instead of getting it in a more quiet and indirect way, and could see nothing but what entirely wrong and unkind, nay, persecuting, in Tom's reproof of her for this unnecessary act. 'I don't like my sister to do such things,' said Tom, 'I'll take care that the debts are paid, without your lowering yourself in that way.' (305)

マギーは、平縫いの仕事でブリキの貯金箱の足しになるように何か貢献できると決めたのであるが、その決意のみならず、自己を変えようという「自己鍛錬」の熱意から最初にリンネル店を訪れて、注文をお願いしようとした。それにはもっとおとなしい、間接的な方法があったが、直接注文をもらおうとした。トムからこのような必要のない行為を止めるように言われてマギーは自分が非難されているとしか思えなかった。トムは妹に「自分の妹がそんなことをしてほしくない」といって、そんなに自分の身を落とすことがなくても、わたしが借金を返済するだけのことは自分で行うつもりだと主張して、マギーが家の外で働くことに反対する気持ちを表現している。女性が自ら経済活動をおこなうことが、男としてのトムの自尊心を傷つけることになると推測することができるだろう。こういう社会的な行き詰まった状況がマギーの前に立ちはだかる。いったい、女性の「成熟の自己」物語とはありえない話なのだろうか。マギーはスティーヴンとの結婚を選択しないかわりに、自分のもう一つ別の選択を選んだ。結婚すれば、結婚以外の選択肢の可能性をみずから排除してしまう結果にもなるはずである。拒否することで、ある意味で女性の新たな成長の可能性を、マギー自身が示そうとしたのではないだろうか。加えて、男性とは釣り合いの取れない不公平な教育の機会しか与えられない環境のなかでマギーは精神的にも激しく葛藤したはずである。

'Yes- I know-dear Tom,' said Maggie, still half-sobbing, but trying to control her tears. 'I know you would do a great deal for me- I know how you work and don't spare yourself. I am grateful to you, But, indeed, you can't quite judge for me- our natures are very difficult. You don't know how differently things affect me from what they do.' (409)

マギーは涙をこらえながら、兄に敬意を示しつつ、兄にはわたしのために判断することはできないという。それはわたしたちの性格はとても違っているから。兄さんと私とでは、様々な物から受ける影響がどんなに違うのか、とマギーは訴える。ところが、トムは冷静にそんな彼女の主張に反論するのだが、いろいろな物から受ける影響が異なるといういい方には、教育の機会や将来の展望、さらに社会のなかで

女性にとっての成熟とは何か、成長への社会的な方向性がなかなか見えてこない。このようにマギーに女性としての成長の可能性が凍結されているように思われてしまう。彼女には「自己育成」の道筋が見えにくく、その可能性すら閉ざされているかのように感じられるのである。

There was a terrible cutting truth in Tom's words-that hard rind of truth, which is discerned by unimaginative, unsympathetic minds. Maggie always writhed under this judgment of Tom's: she rebelled and was humiliated in the same moment: it seemed as if he held a glass before her to show her her own folly and weakness- as if he were a prophetic voice predicting her future failings-and yet, all the while, she judged him in return: she said inwardly, that he was narrow and unjust, that he was below feeling those mental needs which were often the source of the wrong-doing or absurdity that made her life a planless riddle to him. (409)

トムが想像力もなく、同情心もないところの持ち主であり、マギーがその逆に想像力の豊かな人物であるのがわかる。彼はマギーに彼女の愚かさ（her own folly and weakness）を見せつけようとしているのだ。さらにマギーの未来は失敗するだろうと予言的な声で語る。女性は現実の社会から切り離されているがゆえに、女性の領域（家庭、子ども、女性だけの内輪）とどまっている。それはトムから見ると、マギーの生活は計画性を欠いた謎だらけの生き方に思えてしまうことになるだろう。

その反面、トムの新しい経済活動にみられるような資金を投資する金融経済の可能性は、暗示されていて、英国の経済が新世界への変化を見せている点も解読できる。この男性中心的な社会のなかで、女性であるがために、マギーには自分を経済的に生かす手段の可能性が退けられてしまっている。英国近代の産業化のなか、資本主義が田園社会の存在を変えようとしていた。このように旧社会から変化する時期に、マギーは、消えつつあるジプシーたちに啓蒙を働きかけたが、その試みはうまくいかない。教養を重視する知識社会の到来には、より多くの時間が必要であった。結局、女性の社会進出による「成熟の自己」のプロセスはまだ遠くにあり、その終着点はまだ見えてこない。マギーの奮闘の結果、女性がいくら成長を希求したところで、「教養」を重ねて、自己形成を展開することは、社会的には、ほとんど不可能であり、19世紀後半には閉ざされた重いとびらであることが改めて確かめられるのでないだろうか。女性が大人に成長することの困難さがよく伝わってくる⁸。この19世紀半ばの英国小説は当時の女性にとっての成長とは何かという問題を

提起していると同時に、その問題意識は、変わることはない女性の経験と成長の難しさを思わせながら、その難しさは、当時と同じように現代的な女性の自己実現の視点も同時に暗示している。

注

- 1 John R. Maynard, "The Bildungsroman," A Companion to the Victorian Novel, ed. Patrick Brantinger and William B. Thesing (Malden: Blackwell Publishing, 2002): 281-283. 女性主人公の成長を描く教養小説は従来の教養小説のアイデンティティの概念を脱構築する。
- 2 A.S.Byatt, Introduction, *The Mill on the Floss*, xiii.
- 3 Elisabeth Rose Gruner, "The Mill on the Floss," University of Richmond UR Scholarship Repository (2003):p.242. 19世紀初頭から中期にかけての英国の教育に関して、1880年まで英国で義務教育が浸透していなかった点を指摘。特に中流階級に対しては計画的に教育は行われていなかった。
- 4 Susan Meyer, "History's Progress in *The Mill on the Floss*," p.153 Imperialism at Home 「ジブシー」が当時多くの英国の研究者が注目の対象にしていた。消えていく旧社会の象徴であった。それは英国社会の中で田園社会から移行する時期に重なっている点を指摘している。Jed Estyの *Unseasonable Youth* は、独立自営農民、中産農民が消滅しつつある中で、英国の近代化が兄妹の成長に影響を与え、1860年の英国の近代化と小説の舞台になった聖オグの町を対比させて、マギーとトムの関係を読み直している。pp.53-70.
- 5 Susan Fraiman, "The Mill on the Floss, the Critics, and the Bildungsroman" pp.131-132.
- 6 谷田恵司、「ポブの親指ー『フロス河の水車場』における投資」ポブ・ジェイキンに焦点を当てて、彼の経済活動を検討する。英国の近代資本主義のなかでの経済活動の特徴を分析する。p.25-33.
- 7 Dermot Coleman, *George Eliot and Money*, pp.111-112.
- 8 Maroula Joannou, "The Female Bildungsroman in the twentieth Century," pp.204-205. 『フロス河の水車場』がヴィクトリア朝の女性の苦しみを描くことで、女性の成長の難しさに焦点を当てて、古典的な教養小説に疑問を投げかけている点を指摘する。

参考文献

- Coleman, Dermot. *George Eliot and Money*. Cambridge: Cambridge University Press, 2016.
- Eliot, George. *The Mill on the Floss*. London: Penguin Books, 2003.
- Esty, Jed. *Unseasonable Youth*. New York: Oxford University Press, 2012.
- Fraiman, Susan. *Unbecoming Woman*. New York: Columbia University Press, 1993.

- Gruner, Elisabeth Rose. *The Mill on the Floss*. English Faculty Publications, University of Richmond UR Scholarship Repository, University of Richmond, 2003.
- Joannou, Maroula. "The Female Bildungsroman in the Twentieth Century." *A History of the Bildungsroman*, Cambridge: Cambridge University Press, 2019.
- Maynard, John R. "The Bildungsroman." *A Companion to The Victorian Novel*, Malden: Blackwell Publishing, 2005.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home*. Ithaca: Cornell University Press, 1996.
- 谷田恵司「ポプの親指－『フロス河の水車場』における投資」東京家政大学研究紀要第43集(1)、2003年。